

古典の日

九

岩沼



あぶみ摺・白石の城を過、笠じまの郡に入れば、藤中將実方の塚はいづくの程ならん」と人とへば、「是方遥右に見ゆる山際の里をミのわ・笠嶋と云、道祖神の社・かたみの薄今にあり」と、をしゆ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながらながめやりて過るに、みのわ・笠じまも五月雨の折にふれたり」と、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

奥の細道

武隈の松にこそ目覚る心地ハすれ。根は土際より二木にわかれて、むかしの姿うしなはずとしらる。先能因法師おもひ出ツ。往昔むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、「松ハ此たび跡もなし」とハよみたり。代々あるハ伐、あるひハ植継などせしと聞に、今将千歳のかたちと、のひて、めでたき松の気しきになん侍し。



芭蕉も見つめた福島県岩沼市にある二木の松

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

桜より松は二木を二月越シ

たけくまの松みせ申せ遅桜と拳白と云もの、饒別したりければ、

徒歩の旅びとの感覚

芳賀徹さんとたずねる
おくのほそ道

元禄二年五月二日、芭蕉と曾良は福島を出立して、二日かけて伊達領の仙台に向かう。田植歌の聞こえる頃はまた五月雨の始まる季節、二人は雨降るなかの徒歩の田舎道にさすがにくたびれ、意気沮喪することもあるらしい。芭蕉によるその困憊さまの記述が、「おくのほそ道」にかえっていかにも旅の記らしい味わいを与える。

そこには引かないが、二日の晩、飯坂温泉に泊ったときなどは持病の胃痛まで起きて、身も心も「消え入るばかり」の思いさえしたという。温泉とはいっても、当時はまだごく鄙びた共同浴場のようなものだったろう。その湯を出て泊ったのが、またひどく貧しい農家だった。土間にじかに寝を敷いただけで、灯火もない。一晩中蚤と蚊に攻められた上に、夜中から雷雨となり、寝ている上に雨が漏ってきたという。芭蕉のこのたびの旅中、最悪の一夜だった。

そこから先は岩沼のはずれの武隈の松を見て、笠嶋に向かう。だが芭蕉は記述の順を逆にした。それは「五月雨に道いとあしく、身つかれ」てまさに途方に暮れた感覚を、前置につけて強調する工夫であつたらう。笠嶋はあの悲運の公家、藤中將実方の塚のあるところ。西行もここを訪ねて「朽ちもせぬその名ばかりを留め置きて枯野のすすき形見にぞ見る」(新古今)と詠んでいる。芭蕉としてはせむしの墓に参りたかつた。だが降りつづける雨の暮れがたに遙かに見える山ぎわの里と教えられたのは、笠嶋の地名が五月雨の縁語であることを含んだ上で、「笠嶋はいづこ五月雨」との敬慕の句を遠くから献じて「ぬかり道」をたどる以外になかったのである。

「武隈の松にこそ目覚る心地ハすれ」は、その疲労感からの転調であろう。能因法師が二度目に来たときには「跡もなし」になっていたという歌枕の松が、いままた根もから二木に分れて伸びて千歳の緑を見せている。江戸を出てから足かけ三月目、遅桜には遅れたが、この松のめでたさを仰ぎ見て、芭蕉は「目覚る」ほどに嬉しかったのだ。



残すものでなく誇るもの

狂言師の家に生まれ、幼いころから狂言に携わってきたおかげで「古典」や「伝統」という言葉を

古典と私

深く考えることはなかった。古典芸能・狂言・伝統芸能・狂言」というような表記を色んな場所に目にしてきたが、特にその違

狂言師・俳優 茂山逸平 さん



いを指摘する事もなく、両方を受け入れてきた。しかし、二十歳ぐらい

のころだったであろうか、「古典芸能」と呼ばれる事に強烈な嫌悪感を覚えた。理由は「古典」とい

だりでは、地名呼称にも詳しい知識があったことが推測されます。

二人が見たであろう四ノ宮地藏、日ノ岡亀ノ水、三条白川の道標、三条大橋橋脚や擬宝珠、西詰の荒物屋、三条みすや針の看板など、当時をしのばせるものが今でも残っています。

三条大橋西詰に建つ弥次さん喜多さん像は、今の京都をどう見ているのでしょうか。「此の世をばどりやお暇に線香の煙と共に灰左様なら」は一九の辞世です。自分の人生までも洒落にした生涯でした。(NPO法人・都草 山本喜康)



京都市中京区の三条大橋西詰にある「弥次さん喜多さん」像

京の記述も多い弥次さん・喜多さん

文学ウォーク

江戸後期に刊行された、江戸から大坂への弥次郎兵衛と喜多八による笑いに貫かれた滑稽珍道中「東海道中膝栗毛」は、当時の世相風俗を活写し、広く人々に愛読されました。

旅の後半は約三分の一が京都の方々の記述に割られるあたり、十返舎一九の京への造詣の深さがうかがわれます。

ちなみに京都の地名が四十数カ所記されており、作者が方位順路まで正確に判ってなければ書き得ない文章です。

梯子売りを冷かして逆に買われる破目になり、仕方なく持ち歩き千本中立売上るの知人を訪ねて不審がられ、「中立売上る」というから梯子で登るのだと思つた。などこの二人に言い訳をさせるく

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

われると、「時間が止まったもの」のように感じられた。この「古典」とい

う言葉に時代のつながりと未来への可能性を感じて「伝統」の方を自分でも使うようになってい

た。しかし「古典」時間が止まったものという感じがこの数年で大幅に変わった。フランスで1年生活したことも「源氏物語千年紀」を期に源氏物語を読み直したこと

心ときめきするもの

よき薫物たきてひとり臥したる(中略)かうばしう染みたる衣など着たる

『枕草子』二十九段

平安の昔、貴族達は薫物と呼ばれるお香を自らの手で調製しました。その香りは、空間に彩りを添え衣裳を芳しく匂わせ時には大事な方のもとへ……

今、私たちが大切に作りしている香りもまた現代を生きる人々の「心ときめきするもの」でありたいと願っています。

京都本店
京都市中京区丸通二条上ル東側
電話 075(212)5590
産寧坂店
京都市東山区清水3丁目334
青龍苑内
電話 075(532)5590
通信販売部
フリーダイヤル
075(532)5590
受付時間 午前9時~午後5時
(土・日・祝日除く)

